
いちご孤児院よ永遠なれ

幻想天皇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いちご孤児院よ永遠なれ

【Nコード】

N5178I

【作者名】

幻想天皇

【あらすじ】

森の奥にその孤児院はあった。ヘタレだが憎めない翔太を中心に、クールでメガネをかけた総一、シヨタ要因の貴司、笑婦疑惑の立つ茜。彼ら四人が巻き起こす人間模様を語る。

1 いちご孤児院よ永遠なれ(前書き)

一話とか飛ばしてもらって結構ですよ。めんどくさいし。

1・いちご孤児院よ永遠なれ

小川のせせらぎが流れるように、そういった事象はゆるやかに、静かに、止めどなく過ぎてゆくものですから……、彼らも、少しの無常感にのまれてしまったのかもしれない……。

さて、本来なら、その行き着く先は、大海原なのだから……人生はまだまだこれからなのだから……とか最もなことで締めて、お開きにしてしまうのも良いのですが、せつかく来てくれた君に対してそれじゃあ申し訳が立たない。

ちょっと、待っていて下さい……。今、コーヒーを挽きますから。

その間、退屈でしょうから、しのぎに茶話でもしましょうか。菓子子は、そこにあるものを適当につまんで下さい。

地産の香りが良く立つコーヒーなんです。それを（飲み）ほしてから、あすこに行きましょう。

Let me take you down, Cos I'm
going to ……

（連れて行ってあげよう。なぜなら僕も行くところだから）

この先を抜けると、孤児院があります。森の奥に位置してるため

に、光のあまり当たらない建物なのですが……。

シヨウタ、ソウイチ、アカネ、タカシ。

この4人が、孤児院にいた子の中でもとくに印象的でしたよ。ええ、まあ……。

男は目の前の訪問者（私）を窺うそぶりを見せると、話を切り上げた。

乾いた空気に鳴る、一つの咳払いが、また火種となって、話は続いた。青空をのびてゆく、一筋の黒煙が、高く舞っては、消えて見えなくなった。

1. いちご孤児院よ永遠なれ（後書き）

ちなみにビートルズの曲に「Strawberry Field
s forever」という作品があります。今回の作品中の詩も
その1フレーズです。

【おまけコラム】

ワンポイント小説推敲。漢字とひらがな。

小説を書いている時「この単語ひらがなにしようか漢字にしようか？」と迷うことがありますよね。そういう時は「どついう文体にしたいか」を意識すると良いかもしれません。

ここは肝心なシーンだから文章を重くどつしりと構えたい 漢字
中心

ここは日常的な描写の一つだからサクサクと軽快にゆきたい ひ
らがな中心

という風に使分けができると、あらたな書き方の発見につながる
かもしれません。もちろん、フィーリングやインスピレーション
で判断するのも良い。

2・カレーなる孤児院

夜を迎えた孤児院では、食堂でメシの用意が敷かれていた。

森の奥の方に位置する施設は、完全に宵の暗がりには捕らわれてしまつて、月がその小さな明かりを放つ以外は、何もかもが陰に沈んでしまつている。

「今日はカレーか……」

その時の僕は、今日がいよいよ、待ちに待った好物が食卓を彩つた、というのに素直に乗り気になれなかった。

「元氣出せよ。シヨウタ。シケタ顔をしてると、メシ……マズくなるぞ」

親友のソウイチが声をかけてくれました。いつも食事の時は隣に同席してくれて、その日もまたそうでした……。

「そうだよな。せつかくのカレーだし、マズくなつちゃ適わん」

「……んで。どうしたのよ。その浮かない顔のワケは？」

カレーの海に突き刺したスプーンを、感慨深く見詰めると、声をひそめて応えました。ソウイチにしか届かない声で……。

「……。茜つて笑婦だったのか？」

その呟きにソウイチはむせびかけて、口に含んだカレーを思わず嘔きこぼしそうになった。気合いでそれをこらえる。

「……バツ。おまつ、食事中にそんなこと、言うんじゃ、ねえ……」

茜とは、この孤児院で暮らす仲間の一人で、ここに籍をおく（少年）少女の中でも、一際美しく、面妖な幼さを放っていました。

僕は一枚、彼女の写真を持っていました。

晴れの日、向日葵の畑を背景に、白のワンピースのスカートを涼しげに、ゆるく吹いた風になびかせていました。

被っていた麦藁帽を飛ばされないように、その可愛らしい手で押さえる姿がまた、何ともいじらしく、清楚なものでした。

そんな清廉に満ちた茜が……していると思うと、僕は悲しくて仕

方がありませんでした。

「なるほど、そんな噂があったとは……」

「噂じゃない。……見たんだ、偶然、この目で」

声色は何か自嘲的な雰囲気をもっていました。彼のスプーンを動かす手が止まります。

「なるほど。よもすると、目撃した場所はアコだから、……これがあれに重なって見えるワケか？」

「いや、それは今は関係ない。むしろ今は茜さんのことしか考えられない」

彼にとつて、一瞬そのスプーンは鉛の塊のように重く感じられたのかもかもしれません。（多分、彼自身がその錯覚にとらわれてしまったのでしよう）。たまらず置いて、それつきりでした。

「ハア…ハア…茜さんかわいいよ茜さん」

もはや、抱いた写真にうつるその人は幻影のようで、……僕はその写真を大事にサイフの中へ入れて、ポケットにしまいました。

「しっかし、なあ。……おい。ええ？」

ゲリラの追っかけ隊の身分としてはどうなの？」

「はなはだ遺憾な気持ちですよ。そりゃ、ストロベリーのアイドルだからね」

いちご孤児院の名前の由来は、ご想像の通り、苺である。ただ、一期一会の一期から取ったという噂もあるというが……。

（後に知った話だと、イギリスに同名の孤児院があるらしい）

僕たちは、流石にこの年になると、『いちご孤児院』というのを口に出すのも、少々のためらいがあったから日常では、『ストロベリー』とここを呼ぶことも多かった。

2・カレーなる孤児院（後書き）

後書きとかをいちいち読むのがめんどくさい人は、ブラウザの戻る（バック）ボタンを押すと便利です。

【コラム】

ワンポイント小説推敲。ライトノベルと純文学。

このサイト、小説家になろうではライトノベルの占める割合が圧倒的です。

だから「多くの人に読んでもらいたい！」と意識を高く掲げている人は、文章のタッチをなるべくやわらかく、設定をユニークにしてみると良いかもしれません。

実際に書店に並ぶようなプロが書くライトノベルの売れ行きは、「挿し絵」と「設定」が最重要といわれています。

挿し絵については、僕は専門外なので今回はお話は避けます。

となると設定です。なるべくユニークで多くの人が食いつきそうなシナリオを練ってみましょう。ベタでも人気のある展開にするのか、独自性のある新しいものを開発するのか……。

純文学のクラシックな書体をちよつとだけ混ぜてみるのも、なかなかオシャレで「おつ」なものかもしれませんね。

3・実はうしみつとき

しかしまあ、ここからは僕たちの体験したストーリーである。よりリアリティを出すために語り口調を変えてみたいと思う。

僕たちは孤児院に終始隔離されているワケではなかった。平日の日中はちゃんと学校に登校するし、休日は自由に出かけられた。携帯電話について。時代的に普及の色はあった。ただ僕たちがそれを持てるはずもなかった。それだけである。

夜虫の鳴き声が、まっくらな森に、虚しくこだましていた。

翔太は暗闇の中で目覚めた。黒いもやがかかって見上げる天井。まだ目蓋は重い。床につあたのはいつだったっけか。今は何時だろうか。

意識は細い一本のようで、今にもぶつつんと途切れてしまいそうだ。それとも、徐々にそれは戻ってゆくか。

ぼうつとしていたのが、少しずつ視界が確立されて、はつきりとしてきたものだから、このまま布団をかぶってもじれたい気持ちに襲われて、悶絶するのが知れていた。

そのまま浅暗の中をゆくと、そつとドアノブを開いて部屋を出た。廊下で常時点灯の明かりが、中に差し込んで消えた。

ふくろろの音が渡り廊下を通る時に拾えた。暮れは相当。むしろ朝方か。

たぶん僕自身は用を足しに行ったのだと思う。

「うう…寒い」

秋の夜長、冷えた空気が身にしみる。ぶるぶると震える腕をさすり、抱えながら、スリッパの這う音を鳴らせた。

孤児院の名の由来が、一期一会から来ているという噂は興味深いものだった。

少なくとも、僕はここに生温かい人間味や帰属意識を感じていたものだから……。

僕たちはトイレについては共用だった。同級生に聞いたところ、寮住まいの彼もそうだそう。ここについて言うべきことは何も無い。

さすがに年頃も相応なので、個室にゆく者にちょっかひを出したり、茶々を入れたりするものはいない。

僕は白い便器を見詰めていた。真白なそれを見詰めて用を足している。

そこに立ち尽くして事を済ませていると、個室の方から、何かの音が聞こえる。すんすん……、すんすん……、と。しゃっくりのようなものが混じった嗚咽が。

背筋に嫌なものをもらった……。幽霊かなにかの類なのだろうか。ましてや、僕がそんなのに出くわすことになるうとは……。

後ろを振り返るべきかどうか、かなりの時間を使って思惑をめぐらせたことをお察し頂きたい。

事が終わった後に、恍惚にふけて便器にくっついてたワケではないのだ。

キーンと軋む音が背後で鳴った。どうやら鍵はかけられていないらしい。一抹の暗がりにまぎれて何かがいることだけは確かか。

少しだけ扉が開いた。あとは好奇心が勝るか、保身に走るか。

結局、僕は水回りで手を洗って、おそるおそる覗いてみることにした。

ただ、その姿勢は超のつくほど逃げ腰だったと思う。

板。少しだけ間の開いた、白いそれにゆっくりと手をかけて、慎重にそれを覗いた。

すんすん……。すんすん……。

蓋（扉）を開けてみると、そこにいたのは、幽霊や花子さんではなく、一人の小柄な少年だった。

まず先に、足をとらえた（確認した）のだから間違はいない。

3・実はうしみつどき（後書き）

まあ、静々とやっていきますよ。やっぱり人気ないのねん。

【コラム】

ワンポイント小説推敲。読み手と書き手。

書き手のだいたいの方は、頭に浮かんだシーンの映像を文章にする、という方法をとっているかと思えます。

そういった時、書いた文章がダイレクトに伝われば何の問題もないと思います。しかし、時として、それがあまり伝わらないこともあるのです。

頭にある映像をより鮮明に伝えたい。そういった気持ちのある方は、文章を寝かせてからもう一度読んでみたり、情景描写を更に補填してみるのもよいかもかもしれません。

ただ、読み手はせっかちです。特にネット。時として、文章がくどいと飽きられてしまいます。だから、その文章量の調整が非常に大切になってきます。

読み手の視点に立って、一端考えてみるのが、かなり重要だったりします。「自分が読者だったら」。この考え方は、あなたの小説を面白くする更なるスパイスになるでしょう。

4・トイレの貴司くん

そこにいたのは、幽霊や花子さんではなく、一人の小柄な少年だった

僕は安堵から漏れる息をゆるすと、彼に向かって、なるべく優しい調子になるようにつとめて、声をかけた。

「……………どうしたんだよ。こんな真夜中に……………。何かあったのか？」
怯えた様相で、フタの閉じられた洋式の上に、身体を丸めてちょこんと乗っかっていた。

僕が扉を開いたことに驚いたか、目を丸く見開いて、すすり泣きするのを忘れている。

「ほら、これ使って……………」

紳士用、色気のないハンカチを渡した。彼は涙と鼻炎をそれでぬぐう。

「……………ありがとう」

真夜中のお騒がせ者は、丁寧に小さい声でお礼を言った。

僕はこの人を知っている。三国貴司という、院生の一人だった。体つきが小さくて、顔つきも目鼻が整って甘いものであるために、女性の院生のウケもそこそこだとか。(彼女たちにとって)いわゆるところこの、シヨタ要員である。

「僕ね……………。僕ね……………。うわ〜ん」

いきなり泣きついて来られたものだから、胸中であやすしかない。赤子か！

「分かった。分かった…。だからまず落ち着けて、な」

声は全体的に高いものであった。声変わりの期を逃したのが、功を奏したのか、どうなのか。

「ひどいんだよ。今日もなんだよ……。僕、もう、ピンチだよ」

「もうちよい具体的に。何がどうしたというんだ」

「あのね……。あのね……」

それから、彼は一つの拍子を置いて、そのまま喋り出しました。

話していた事をまとめて縮め上げると、だいたいこんな感じですが、これが話としてはひどいもので、口に出すのものはばかられるくらいで……。今回は、そつとこそばゆいくらい小さな声で申し上げたいと思います。

茜が内輪で水商売をしているというのは噂にもありました。そうなれば、関係を持っている者も少なからずいるということですが。

彼らのうちの数人は、カンパでもって資金を募らせて、その足しにしているという事だそうで、彼はそれに巻き込まれたらしいのです。

ただし、これはタケシの名誉の為にオブラートに包みながら、優しく言ったに過ぎません。実際は

仲間内で資金を出しあっているところに、彼がカツアゲされた分もその勘定に入っている。というのが客観的な判断です。

何と生々しい金銭レートでしょうか。森の奥深くの孤児院でここまでの経済活動が営まれているとは、僕も知りませんでした。

「……ということなんだよ」

僕は男色の趣向はなかったから、胸中にいつまでもすがりついているそれを、はぎとって再び洋式の上におろしました。

「へえそれは大変だったね君もよく耐えてきたと思うよ偉いねではそれじゃあお休みなさい僕はこれにて」

この手の事に関わると、ろくな事に至らないのは周知で、僕はまた一目散にスリッパを進ませて、部屋に戻って眠りにつこうとはしていたのですが、細く小さい手が一つ服の脇腹あたりを優しく握って、それを許しませんでした。

「……ここまで（話が）来たんだから……ねっ。ねっ。乗りかかった舟じゃない。お願いだよお」

「ここが歯車を止める最終ラインだったのかもしれませんが。」

「……まあ。あくまで、……あくまで1つの可能性として聞こうとは思いますが…。君は行為自体には関与していない訳だよね？」

彼の運命が決まってしまうかもしれない大事な問答である。某クイズ番組でいうところのアタックチャンスである。僕とて愛しい茜さんを汚す者を生かして返すわけにはいかない……。

「僕は夜中にいきなり呼ばれて、シメられたただだよ。そしたらさ、またこの前みたいに狩られたんだよ。……その後は、ずっとシヨックで泣いてただだよ。」

僕は彼を生かそうと思いました。同時に、助けてやるのか、という優しい思いやりの気持ちも芽生えました。

4・トイレの貴司くん（後書き）

うん。正直こんなところ読んでくれる人がいるかどうかかわからないんだ。僕の小説人気ないし……。

【コラム】

ワンポイント小説推敲。読み手と書き手。（part 2）

一から物語を通して読む「読み手」と、ある程度構造が頭にできている「書き手」には、当然のことながら理解度の差があります。温度差、と言うこともできるかもしれませんが。

頭の映像を文章にする作家の場合。いくら書き手が情熱的に頭の映像を訴えかけても、それが上手く伝わらずに、逆に白けてしまうこともあります。

小説という作品の中では、読み手は一方的に受ける側です。何にもない真つさらな白紙の状態から、書き手から提供される文章を頼りにイメージをふくらませてゆきます。たまに、「読者と一緒に作る物語」なんて手法を目にしますが、それは相当なテクニックが試されると思います。

心持ちは親切丁寧。実践ではシンプルで読みやすく。これを心がければ、作品の完成度もうなぎ登りで良く……なるかも。

5・けっこう大事なんだよ。何気ない日常だって

今日の朝方は惰眠を諦めて、通例起きる時間に目覚ましをセットして、今に至る。

翔太はしじみの味噌汁を音を立てて、ずるずるっとすすった。

朝。今日は金曜日、いよいよ週末である。

「翔太……。昨日あんまり眠れなかったのか？　ポーっとしてるぞ」
翔太が口元にいつまでもかかげた、すでに空になったお椀を覗いて、総一は言った。

僕は、親友に無理難題の責任の一端を押しつけてしまうのはためらわれたのだが、とりあえず昨日あったことを話してみました。

彼は『：そうか』とだけ随所に相槌を挟むと、真摯に耳を傾けてくれました。

「やっかいだな。そういうのは穏便に済ませるのが最善なんだが……」
それは言うに及ばずである。

「とりあえず、お前はとうしたいんだ？

最終的にどこを解決したい？

三国の財布を施錠して終わりたいのか、それとも、茜自身をどうにかしたいのか」

僕はその時には、何をどうしたいのか分からなくなっていた。全てのことに對する、関与を否定したかったのか。

「分からない……」

本心から迂闊にもそう応えてしまった。

「そうか。ははっ。お前らしいな。じゃっ、そっからじゃね？」

けらけらといたずらめいて笑うソウイチを尻目に、朝飯をがつついた。目玉焼きの黄身が半熟であることに些細な幸せを感じた。

ジャージから制服に着替えた。その後、学校に登校する支度を終えると、平素からそうやっている通りに、僕たちは孤児院を出て、

続く森を抜け、街へ繋がる車道へと進んだ。

いつものように手を軽く動かして『じゃあ』とだけ別れ際の挨拶を交わすと、通う学校の違う僕たちは別々の道を行った。

彼はまず駅を目指して歩く。僕はこの先にある街の学校である。

朝の静寂にのまれた、おとなしい街。昨晚の片付けをするラーメンの屋台。ほどなく通勤ラッシュが迫る、徐々に車のたまってゆく県道。昼夜爆音を唸らせているパチ屋でさえ、朝は『魂^{たま}』の抜けたように静かに佇む。

引き戸を開けて、トンつとカバンを机におろすと、今日もまた、変わり映えのない日常が始まるのだった。

チャイムが鳴った。ホームルームが始まる。

それぞれの日常。彼らと僕のルーチンワークが着実に施行されて今に至る。

ええと。とりあえず昼食はラーメンを食べた。言いたいことはそれくらいか。

メンマが6本だった。少しの幸せを感じた。

5・けっこう大事なんだよ。何気ない日常だって（後書き）

僕の文章は認められているんだろうか。読み直してみたら、けっこう中身スカスカの上、読みにくいんだが……。

【コラム】

ワンポイント小説推敲。涼宮ハルヒの憂鬱。

さて、このサイトではライトノベルが圧倒的な人気を誇っている。ということを経に述べました。

商業用のライトノベルで（休載中の）今なお根強い人気を博している、いわばライトノベルの頂点ともいえるのが、初作「涼宮ハルヒの憂鬱」をはじめとした「涼宮ハルヒシリーズ」です。ご存じの方も多いと思います。

この作品は「涼宮ハルヒ」という破天荒な性格の少女に、怠惰的な日常を送っている主人公の「キョン」がいろいろと巻き込まれてゆくお話。（詳しいあらすじは割愛。興味をもたれた方はぜひ一読あれ）

爆発的なその人気の秘訣は何なのか……。考えてみたところ、なるほど、いろいろその要素はちゃんと盛りこまれているようだ。

巷で騒がれている一説によると、主人公である「キョン」にとっても感情移入しやすいように書かれていることなどがささやかれています。

キョン君の心情を理解することで、自分もいつしかそれを見守っている、応援団員の一人になっている。主人公が自分とシンクロするタイプの小説もよく見ますが、そういうのではなく、自分がその物語を外側から見守ることに面白さを見出せている。野球やサッカーの観戦に近いです。

応援してくれる人がいる。野球もサッカーも、これほど頼もしいことはありません。一旦、そこに興味を見出した読者は作品も最後

まで読んでくれることでしよう。そして彼らは次巻を手にとります。もしくはそれを楽しみに待ちます。

さて、ここまで「涼宮ハルヒシリーズ」という一つの作品についていろいろ考察してみました。この小説も根強い人気を占めているだけあってなかなか奥が深いです。いろいろ上達のヒントが隠されているかもしれません。私自身は、この小説はストーリー構成が非常に上手い逸品だと思います。

6・もみじ100%

トントントンと教科書とノートをそろえてカバンに詰める。
すでに終業のチャイムは鳴った。放課後である。僕はさておき、
ここからが本業の者もいるのだ。彼らはもう教室にいない。

結局、いつもの通り、僕は粛々と下校することにした。決して付き合いが悪い訳じゃない。

友達を誘ってゲーセンやファストフードで立ち食いをするのも、赤オレンジ色で煮詰まってゆく教室に居座るのも、気がそそられたら選択肢のうち、だ。

昼の街。陽の光を浴びて徐々に活気づいてくる。

電光掲示板もその光を段々と際立たせてくる。朝はでくの坊に過ぎなかった高層ビルも、人の出入りが活発なものになっている。

排気口から吹く生臭い風を浴びて、爆音を唸らせるパチ屋の前を過ぎて、僕は帰り道を進んだ。

そうこうしている間に森にさしかかっていた。その奥に孤児院はある。空は青く、快晴。木々はその葉を色づかせている。

或る秋口の日のことであった。

ちょうど中腹にたどり着いたあたり。

紅、黄、褐色に染まりきった葉が、雨のようにさめざめと降りしきるなか、茜はいた。

そこは、この森に設けられた森林公園の周り場の一つで、広場のようになっている。木々が空間をぽっかりとあけて立ち並ぶ以外はなにもない。

彼女がそこにぼつりと佇む姿は、周りの風景と良く調和していて、完成された一枚の絵画を見ているかのようでした。ほのかに匂わず

物悲しげな哀愁の漂いからは、朽ち果てた葉を落とす木々たちの、絶対的な中心にいるようにも思われました……。

晩年。僕はこの光景にそれを感じた。朽ちるもの、腐り果てるもの、終焉を迎えるものの、意地の美德。様々な感情も収束して、最後にはここに到達するのかもしれない。

最初は、声をかけるのもためらわれた。触れてしまったのなら、砂上の楼閣。とたんにばらばらと崩れてしまうようにも思われたから。一声かけてしまうというのは、このドミノでできた超空間への、関与に他ならない……。

それでも、このまま引き返して機を逃がしては何も生じないと、なけなしの勇気をふりしぼって僕は話しかけてみた。

「よう。……紅葉？」

僕の突然の声かけにも、さして驚く様子はありませんでした。

「うん」

木々たちを眺める姿勢そのまま、ゆっくりとその柔らかさそうな唇を動かしました。

そこに詰め寄る際に、落ち葉を踏む音が立ちます。彼女はそれを背中であき流しました。

「何か考え事でも？」

「……どうして？」

彼女は質問をもって僕の問いにこたえました。俗に言う（の）かどうかは分かりませんが、質問返しです。

「しげしげと物憂いげに眺めてるから」

枝葉の端先の黄色に染まる色の濃くなったところを彼女はじっと見つめていた。

「……さあ。そうかもしれない。でも語らないよ……。翔太君には乙女の悩み、わからないでしょ？」

「まあ、何とかと秋の空って言うくらいだな」

私は空を見上げて返した。

「しつこくしないとところは加点材料かな……。私、先に帰るね」

彼女はそう言っただけを返す。セーラー服の後ろ姿が時折吹く風に布地をはためかせて、小さくなってゆく。

せつかくのチャンスを、収穫なしの手ぶらで見送る訳にもいれない。僕はそれに届くように、少し声を大きくして言葉を飛ばす。

「こ、こつ、紺色!？」

しまった。勢いあまって口が滑った。それは今言うべきことではない。帰って同僚と話すべきことだ。

彼女は一瞬、ピタリと足を止めた。しかしまた歩き出す。

「……残念ハズレ。それはブルマ。でも今回はサービスです」

彼女は今日、体育の授業の後は道具の片付けに時間を食って、急いで制服に着替えたという。

歩く彼女は軽めにその拳を握った。たぶんそれには『あのエロ河童め覚えてろ』という意味合いが込められていると思う。

6・もみじ100%（後書き）

よしよし。先日やっとアクセス数が伸びました。じわじわっとくるぜ。そこがたまらないんだぜ。持続性があった方がもっと嬉しいんだぜ。

【コラム】

ワンポイント小説推敲。万人受けの鉄板シナリオ。

時として、型通りにお膳立てされたシナリオをよく見かけます。例えば、遅刻しそうな朝、食パンをかじった転校生と出合い頭に衝突。実は長年想いをよせていた人との血縁関係が見つかったり…。そういう、いわゆるベタな展開。

ラブコメからサスペンス。様々なところで見受けられますが、決して悪い手段ではない。

万人受けの鉄板シナリオは無難さや安定感が売りなので、失敗することが少ないです。ウケもそこそこ。リスクも少ない。

しかし、それに頼りきって、シナリオの思考を放棄してしまうのもまた、困りものでしょう。「またベタな展開かよ。新鮮味がないな」と読み手にだんだんと飽きがまわってきます。目の肥えた一部の読者を満足させることも難しいでしょう。

結果、用いるのであれば、何個かつまんで使うくらいが丁度いいかと思えます。

7. いいえ。彼はチキンです。

「なあ……。どうなの？　今時、脱脂粉乳って」

夕食時。シヨウタは湯呑みに溜まる白濁のそれをすすする。ずるずるとそれを飲みほすと、総一の方を窺った。

「さあ……。珍しいってことくらい？　いつもは出ないし……。お前もいつもはインスタントのコーヒーにクリープ入れてるだろ。そののコーヒー抜きだよ」

彼が湯呑みを持ちあげると途端にメガネが雲る。いつもクールにキメている当人の姿と反したギャップが、滑稽でたまらない。できるだけこつちを振り向くな。吹きこぼす。

そんなこんなで。いつもの他愛ないやりとりをしている最中に、一人馴染みの薄い顔が僕の隣に座る。これで僕の両隣には総一とその男が席を置くことになる。

「よう。橋本」

彼は人当たりが良くなるように取り繕って僕に迫った。

「どうしたんだよ。山口。珍しいこともあるもんだな」

「明日は雪でも降るんじゃないか。ははっ」

総一が僕の言葉に続いて一声被せた。そして表面的な笑みを浮かべる。僕たちにとって、こういったやり取りは形式的なものである。「どうだ。最近？　聞いたところによると調子は上々らしい……。良かったじゃないか。ただ、勢いあまって自分の首、絞めるような事はするなよ……。特に、勇み足踏んだら断崖絶壁だったなんて……。よく聞く話だろ？」

彼の声は比較的低い音程だから発言に少しの威圧感をともなった。「三国から聞いたんだけど。そっちも、ほどほどにな……」

彼はタカシを干しているうちの一人であるそうだ。当人からそう

聞いた。

「ところで。それなただけだよ。その……彼とかどうにかできないの？ 泣きついてこられたんだが」

思い切って直球、それも『どストライク』に賭けてみることにした。

「ほら。こうゆーの」

これが彼らにとっての余計なこと。彼は先ほどの話を思い起こさせた。それを了承した上で僕は話を続ける。

「そつちも事があまり大きくなるのは望まないだろ。何とか内輪で済ませて一件落着つてことにできないのか？」

彼はその言葉に更なる威圧感をもって応えた。

「ん？……お前がその分を立て替えてくれるのか？……それともなに。脅しをかけようとしているのか？」

「いやいやいやいや。滅相もない……。ほんの冗談だってば。そーんな殺気立つちゃあ。やーよ」

返答に要する時間、実にコンマ3秒。

できるだけ穏和に。これが絶対条件。相手の神経を逆撫でしないようにしよう。

「とにかく。これに懲りたら余計なことは考えないことだな」

そう言い終わると、彼は膳を持ってスタスタと去っていった。相変わらずこの足は貧乏ゆすりを止めない。

頃合いを見計らって、総一は翔太に言葉をかけてやった。

「『いつにも増してヤな感じだったな』。そう言っただけでも、親友の勤めってか？」

彼は始終、二人のやり取りを目の当たりにはいたのだが、その気迫にのまれて手をだせなかったらしい。

「勘弁！ シツ。聞こえるだろ！」

「お前。筋金入りのヘタレだな……」

三国くん。君は依頼主を間違えたのではないだろうか……。少なくとも、この光景を目にしたらそう考えを改めざるを得ないと思う。

愛嬌が良いが頼りがいが無い。それがこの男なのだから……。

不意に山口はその足を止めた。そしておもむろに振り返って、こちらに言葉を飛ばした。

「ああ。一つ忘れてた。とっておきのクイズがあるんだ……」

突然の挙行に翔太はビクツと身体を震わせた。

「……ほら見る！ 言わんこっちゃない。どーすんだよ」

総一は落ち着いてそれをたしなめる。

「いいから聞いとけ」

翔太の震える肩を彼はポンと叩いた。

「翔太くんが昨晚、男子トイレで貴司くんから身の上話を聞いた時あの場所には他にももう一人の人物がいました。さて、……それは誰でしょう？」

その言葉を聞いた翔太は背筋に寒気を覚えた。

あの場にもう一人いた、だと……。

たぶんこの男ではなからう。まさか今度こそ幽霊か……。

「ヒント……。正解は俺じゃない。そしてそれは意外な人物。その2つがヒントだ」

それを言い終わって満足したか、彼は振り返って、再び歩みを進めた。

7. いいえ。彼はチキンです。（後書き）

アクセスカウンターが伸びたと思ったたらまた収まった。こりゃあ、まいったね……。

【コラム】

ワンポイント小説推敲。複数の解釈。

「食パンにバターを乗せてよく焼いたりする。」

という一文があると思います。さて、この文章には2つの解釈があると思いませんか？

解釈1：よく〓often

食パンのバター乗せ焼きを私は日常的にします。

解釈2：よく〓well-done

食パンのバター乗せをこんがり焼きます。

うーん。まぎわらわしいですね。意図してやる場合を除いて、多義語を使う時は複数の解釈を含んだ文章に注意しましょう。

単語や文節の順番を変えてしまうことも解決策の一つです。

8・Out! / and / オウト!

嘔吐。独特のつわりがアカネを襲った。たまらず彼女はむせびかえってしまつた。

水回りの白く光る水滴を見る。また顔を洗面台にうずめると、彼女はふたたび戻した。鏡にのぞける自分の顔はひどく不様なものだった。

大粒の粕が混じる黄色い液。それがとめどなく口から溢れる^{あふ}。

「やあ。茜」

嘔吐感も引いてひとまず気分も落ち着いていた。そんな時、女子トイレを少し出た廊下のところで一人の男に出くわした。

「どうしたの?……や、ま、ぐ、ち、くん?」

「なんだい……。随分とこそばゆい呼び方じゃないか。もしかして嫌われてる?」

彼は何のためらいもなくそんな事を聞いた。

「さあね……。でも、少なくとももしつこい男は嫌いよ」

「ははっ。こりゃ日頃の態度を改めなきゃいけないかもな」

この人は、もっと深いところの根元を反省した方がよさげね。三国くんの件といい……。

「用がないのなら、失礼するわ。お休みなさい」

アカネはそう言い終わると、自分の部屋へ戻ろうとした。しかし、彼の言葉がそれをせき止める。

「おいおい。『お得意様』に対して、随分冷たいんじゃないの? もうちよつと愛想良くしてくれてもいいじゃない」

しつこい男は嫌いだ。さっきそう言ったのをもう忘れてしまったのだろうか。

「なあに? もっと世間話を続けるってこと?……昨日、食堂で声

を大きくして何か言っていたわよね。……あれは私へのあてつけだったのかしら？」

アカネは不機嫌そうに応えた。

「まさか。……翔太くん、君の隠れファンだからさ。あの場、深夜の男子トイレに、一仕事終えて『近藤君』を抱えた『ストロベリーのアイドル』がいたと知ったら、どんな反応起こすか楽しみでね」「つくづく、嫌な性格してるわね……」

彼はあたかもイギリスの上流貴族が取るような、慎み深いお辞儀をした。

「お褒めに預かり、光栄です」

手の込んだ皮肉であること……。

「まあ、そう恐い顔をするなよ。お互い仲間内だろ」

「誰のせいでこうなってるか分かって言ってるの？」

突き上げて落とす。人の感情をもてあそぶのは朝飯前、か。

少しの時間があった。夜虫の音がそれを埋めるように鳴る。そんな中、彼がぼつりと口を開いた。

「ついでるよ。何か。ほつぺた。口のあたりに」

彼はアカネの唇に近い頬を指差した。

「なっ!?!」

やばい。私としたことが……。やばい。さっきのアレが付いていたというの……。だとしたら、淑女の体裁に関わるわ……。マジでヤバい! ピンチ。

さっとポーチに手を入れて、ハンカチを感覚でまさぐる。

「えっ? えっ? どこっ!?!」

落ち着きなさい。落ち着くのを、私。なるべく平静を装いなさい。

そんな動揺の渦中にいる私に、彼は意外な言葉を投げかけた。

「あっ、ごめんごめん。気のせいかな。何もなかったみたいだ」

彼は何の惜しげもなく前言を撤回した。口振りは故意に満ちている。わざとだ。

ようやく、さわがしくポーチを掻く私の手に引っかけたのは、ハンカチではなく手鏡だった。

結局、取り出した手鏡にはいつもと変わらない、さっぱりとした顔の私が映っている。その顔には何もついてない。

「へっ？」

まだ動揺の整理がつかない私。そんな時、一つの考えが浮かぶ。

おちよくられた！

わなわなと怒りに似た感情が湧き上がってきた。……落ちつけ。落ち着くのよ、私。

ぐっとその下唇を噛み締め、軽くそのこぶしを握る。

何なの。私をおちよくって面白いの。そうよね。そういう性格だったわね。ああーもっつ。

いろいろと思惑している様子をおかしく思ったのか、彼はさらに言葉を続ける。

「ははっ。なーにそんな血相抱えて慌ててんだよ。ごめんって。もしかして、見られたらマズいもんだったとか？」

完全にしてやられた。もしかして全てを理解して一連のカマ掛けをやっていた、という可能性も捨てきれないのがこの男の恐いところである。

「……バカ！」

恥ずかしさから、顔がみるみるうちに火照って真っ赤になってゆくの分かった。感情も堪えきれないところまで込み上げてきた。

許しなさい。私にはもう張り手という選択肢を取るしかないんで

す。それはあなたが悪いの！

パチン！

「いてっ！」

アカネは山口の頬に一発、きついピンタを浴びせた。その後、彼女は一目散に自室へと駆けてゆく……。

8・Out! / and / オウト! (後書き)

さて、そろそろ僕のzipを貼ってアクセス数を稼ぐしか方法がなくなってきた訳ですが……。

どーすんだよこれ。このままここを激萌エロ画像王国にしてしまっ
つていいものなのか!?

【コラム】

ワンポイント小説推敲。小説とSS。ショートショート

本サイト「小説家になろう」では、周知の通り、小説が多数を占めていきます。特に簡素なタッチのライトノベル。これについては語るに及ばずですね……。

さて、よく2chなどの大型掲示板サイトを覗いてみると、SSという書式が目立ちます。今回はそこでささやかれていた事を検証してみます。

同人や2次創作などに多く使われるこの方式は、台本調の形式が印象的です。

その件について語らっていたスレッドがあつたので、それを引用してみました。今年大ヒットした(らしい)作品の「けいおん!」をもとにして語られていた様子。以下抜粋。

ライトノベル
小説

「やっぱ可愛いなあ、あずにゃんはあ……うりゃっ!」

「ちよっ!?! いきなり抱きつかないでくださいよ唯先輩っ!」

SS

唯「かつ、可愛い! すごく良いよっ!」

梓「ちよっ!?! い、いきなり抱きつかないでくださいよっ!」

>考察<

- ・小説には話中に名前が必要。SSは省略できる。
- ・小説は「対象人物の名前」と描写が必要。それを割愛できるSSは速効性に優れている。ネット上のせつかちな読者に素早くアップロード。また、軽快に読み進める疾走感も「売り」の一つ。

さてさて、小説家になろうではあまり目にする事のないSSですが、ネット上での独特の強みもあるというのが今回の結論です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5178i/>

いちご孤児院よ永遠なれ

2010年10月9日04時09分発行